

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
共同プロジェクト研究
2025年度研究【経過・成果】報告書

研究代表者	所属部局・職名		氏 名				
	文学部キリスト教学科・教授		加藤 磨珠枝				
研究課題	初期中世イングランドにおける旧約聖書の伝統と革新 —Junius 11 写本を中心に—						
研究組織 (研究代表者・ 研究分担者) 2026年3月現在	所属研究機関・部局・職名		氏 名				
	文学部キリスト学科・教授		加藤磨珠枝				
	文学部文学科英米文学専修・ 教授		唐澤 一友				
	文学部キリスト学科・教授		長谷川修一				
全研究期間	年度2025～2027年度						
研究経費※	2025年度		2026年度		2027年度		総計
(上段:支出金額)	2,000,000	円	0,000,000	円	0,000,000	円	2,000,000
(下段:採択金額)	2,000,000		1,700,000		2,300,000		60,000,000

※1円単位で記入

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。 本研究は、初期中世イングランドにおける旧約聖書伝統の受容と発展を、写本学・美術史学・中世英語英文学・聖書学の研究者が協働して解明する学際的プロジェクトである。特に、挿絵と古英詩を併せ持つ希少な <i>Junius 11</i> 写本（オックスフォード大学ボードリアン図書館蔵、10世紀末～11世紀初頭制作）に注目し、その図像とテキストの関係を、カロリング朝写本やロマネスク写本など関連資料との比較を通して検証する。これにより、アングロ・サクソン時代（6世紀頃～1066年まで）における独自の聖書解釈やキリスト教文化の形成背景を明らかにすることを目指す。本学の人的・物的資源を活かした独創的な取り組みであり、英国国教会の伝統理解と人文学研究の発展に寄与する点に大きな意義がある。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
〔初期中世美術史〕 〔中世英語英文学〕 〔聖書学〕

研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究は、初期中世イングランドにおける旧約聖書の伝統とその受容・変容を、写本学・美術史学・語学文学・聖書学の諸分野を横断して総合的に考察する学際的研究として企図されたものである。特に、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の MS Junius 11 に焦点を当て、同写本に収録された古英詩と挿絵の関係性、さらにはその背後にある旧約聖書伝統の継承と革新を明らかにすることを目的とした。Junius 11 は古英詩を伝える四大写本の一つであり、豊富な挿絵を伴う点で他に類例がなく、アングロ・サクソン期の聖書解釈・文学・美術が交錯する独自の文化的所産として位置づけられる。本研究では、同写本の挿絵とテキストの関係を中心に、9 世紀カロリング朝写本や 11～12 世紀ロマネスク写本との比較を通じて、初期中世イングランドにおける旧約聖書の伝統とその展開を多角的に検討した。

研究期間中には、まず美術史学の領域において、加藤は旧約聖書挿絵の伝統に関する基礎的検討を行い、従来 MS Junius 11 や Cotton Claudius B. iv の源流とされてきた「コットン創世記」(6 世紀)の挿絵系列との比較を進めた。その結果、Junius 11 の天地創造場面には、「ヤコブの梯子」や「詩編」テキストの挿絵など他の旧約場面の要素が混成され、さらに墮天使の物語が強調されるなど、従来の挿絵伝統には見られない独創的な表現が確認された。これらは単なる図像の模倣ではなく、10 世紀末～11 世紀初頭のイングランドにおける神学的関心や文学的創造性が反映された結果である可能性が高い。現地調査において写本を実見した際には、羊皮紙の質や線描の特徴、場面ごとに異なるインクの色調など、制作工程を考える上で重要な物質の手がかりも得られた。これらの観察は、挿絵制作の段階性や複数の画家の関与を示唆するものであり、今後の分析に資する知見となった。

一方、唐澤が本年度の研究計画に従い取り組んだ、MS Junius 11 写本の挿絵とテキストの関係性については、Genesis A・B の冒頭部分ではテキストの内容におおよそ即した挿絵配置が確認されるものの、物語が進むにつれて挿絵とテキストの両者の対応が曖昧になる傾向が明らかとなった。これは、写本制作時に挿絵計画が完全には整っていなかった可能性や、詩の内容理解に基づく図像化が一貫していなかった可能性を示すものである。特に、Exodus や Daniel のテキスト周辺に残された空白部分にどのような挿絵が挿入される予定であったかについては、当初の計画では具体的な推定を試みる予定であったが、テキストと挿絵の対応が必ずしも厳密ではないことが判明したため、現段階では確定的な結論を導くことは困難であるとの判断に至った。これは、写本制作の過程において挿絵の計画が部分的に変更された可能性や、複数の写本伝統が混在していた可能性を示唆するものであり、今後の研究課題として残された。さらに、テキスト分析の面では、Genesis・Exodus・Daniel の各詩において綴字や語彙に特徴的な違いが認められ、これが写本成立過程の複層性を解明する重要な手がかりになり得ることがわかった。

長谷川は、年度初めの計画通り、MS Junius 11 の創世記 A テキストの筆者が参照していたと想定されるラテン語訳聖書底本について、先行研究を手がかりにして考察した。その結果、A. N. Doane がすでに、固有名詞のスペルや呼称、具体的な語彙という二つの点から Vetus Latina が底本に使われている可能性が高いと主張していることが判明した。特に「天地創造の描写」、「ノアの洪水」、「アブラハムの挿話」の三つの物語細部において、Vetus Latina の影響が顕著に表れている。一方、Vetus Latina と、ヒエロニムスによるより新しいラテン語訳であり、ラテン・カトリック教会のラテン語訳聖書となった Vulgate のテキストが混合したテキストが当時流通していた写本の主流を形成していたことも推測される。これは、当時のイングランドにおける聖書テキストの受容が単線的ではなく、複数の伝統が併存していたことを示すものである。また、聖書テキストが Vulgate 化されたのちも、聖歌や祈祷文により古い Vetus Latina の語句が保存され、写本制作においてそれらが採用された可能性も検討する必要があるだろう。テキスト選択の背景には、当時の宗教実践や典礼文化の影響も考慮する必要がある。2025 年度においては、こうした課題が明らかとなった。

研究【経過・成果】の概要 (つづき)

本研究の進展において特筆すべき点は、写本の物質的側面とテキスト・挿絵の内容分析を統合的に扱った点である。現地調査で得られた羊皮紙の質感、インクの変化、線描の特徴などの観察は、従来の図像学的研究では一部で取り上げるにとどまっていた領域であり、今後の重要な参考となった。また、研究代表者による写本研究書の翻訳監修を通じて得られた中世写本の象徴性や実用性に関する知見は、Junius 11 の制作意図や社会的背景を理解する上で新たな視点を提供した。写本が単なる宗教上の聖典ではなく、共同体の記憶や信仰実践を支える象徴的媒体であったことを踏まえると、Junius 11 の挿絵の独創性やテキストの選択は、当時のイングランド社会における宗教文化の再編成と密接に関わっていたと考えられる。

以上の成果を踏まえると、本研究は MS Junius 11 の挿絵とテキストの関係性、写本成立過程、旧約聖書伝統の受容という三つの主要課題に対して一定の進展をもたらしたと言える。特に、挿絵の独創性やテキストの語彙的差異の分析は、従来の研究では十分に扱われてこなかった領域であり、学術的意義は大きい。また、現地調査による物質的観察は、写本研究における基礎資料として今後の研究に資するものである。

一方で、未解明の課題も残されている。挿絵とテキストの対応関係の曖昧さは、写本制作の意図や計画性を判断する上で大きな制約となり、特に Exodus・Daniel の空白部分に関する推定は現段階では困難である。また、古サクソン語詩の翻訳を含む文化交流の問題についても、資料の制約から十分な検討には至っていない。これらの課題は、今後の国際共同研究や関連写本の比較研究を通じて深化させる必要がある。本年度の研究成果をまとめるならば、MS Junius 11 を中心とした初期中世イングランドの旧約聖書伝統研究に新たな視点を提供し、学際的研究の可能性を示した点で意義深い成果を挙げたと言える。今後は、本年度の研究で得られた知見をさらに深化させつつ、2027 年度の最終年度にむけて、共同研究の成果公開を目指していく。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

Kazutomo Karasawa, 'Orthographic Evidence Reflecting a Formation Process of an Exeter Book Archetype', *Review of English Studies*, 2025

<https://academic.oup.com/res/advance-article-abstract/doi/10.1093/res/hgaf089/8342542?redirectedFrom=fulltext>

(2026 年 3 月 15 日閲覧)

②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

ルーシー・フリーマン・サンドラー、加藤磨珠枝監修、立石光子訳、白水社、『写本に描かれた本たち：西洋中世からルネサンスにみる本の象徴性を実用性』、2025 年、258 頁

③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

立教 SFR 共同研究「初期中世イングランドにおける旧約聖書の伝統と革新—Junius11 写本を中心に—」中間報告会、2026 年 2 月 27 日 (金) 17:00～19:00、立教大学池袋キャンパス、ロイド館 5 階 512 号室